

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 優秀賞

だれかのために

松任中学校二年

中村 なかむら

風沙 なぎさ

「あなたは、AとDのどれですか。」道徳の時間が始まった。「A、自分から進んで家の前をした。B、親に言われてした。C、自分から進んで地域もした。D、まったくしなかった。」今日の授業は昨シーズンの大雪の時に雪かきをしたかどうかだった。この時の大雪は、私が生まれてから一番だったように思う。クラスで多かったのは、Aだ。私も今までそうだった。それと反対にDも数人いた。そして私は：三十四人中、四人しか選ばなかったCだ。先生はA、B、Dを選んだ人たちにさまざまな理由をたずねていた。特にDを選んだ人たちの理由には驚いた。「家族がしていたから。」「めんどくさかったから。」など。ただだって雪かきはやりたくないはずだ。でもだれかがやらなくてはならない。今まで私も雪かきされている道をあたり前のように通っていた。でも、この授業を通してだれかがやってくれていると知り、昨シーズンの私の行動はやってよかったことなんだと分かった。昨シーズンの私の行動についてふりかえろう。

朝、二階から降りてくると母が「今日、学校は十時半からやって。」と私に言った。急いで窓にかけより外を見ると、一面真っ白な世界に包みこまれた。町のいたるところで人々が雪かきをしている。すぐに朝食を食べ、着がえて妹と外に向かった。げんかんを出ると家の前の道路まで続く細い道がつくられていた。きつと父がやってくれたのだろう。そう思って家にスコップを取りに行こうとしたとき、父の姿が目に入った。もう、仕事に行っただけだと思っていたので驚いた。父の車を見るとまだ一つも手をつけていない様子。いったい何をしているのだろう。近づいてみると、そこにはお向かいさんの車出しを手伝っている父の姿があった。スリップしている車を押ししたり、車が通れるように雪をどかしたり。自分のことを後回しにして、自分から進んで地域の人を手伝っている父をすごいと思った。父はCの人だった。

この父の行動を見た私は、まず、父の車の雪おろしを始めた。思っていたより多くの雪が車にのっていた。やがて、お向かいさんの車が出ら

れたところで、車にのっていた奥さんが車を降り、父に「ありがとうございませう。本当に助かりました。」とお礼を言いに来た。父はうれしそうに、やりきった！という顔になっていて、見ている私も心があたたまった。父が仕事に行っただけで、次に私たちは家の前の道路の雪かきをした。母は歩いて仕事に行くと言ったので、母の車は雪にうまっただまになっている。私の家のまわりには、おじいちゃんおばあちゃん、幼児や小学生など私と同じ中学生がいないのだ。人手が少ない中で近くの溝まで雪を運ぶことになった。しかし、その溝までは大きな家の一つ分の距離を運ぶことになる。うちにはソリ一つとスコップ二つしかない。そのうえで、登校するまでの間、地域のためにがんばった。足元が悪い中で、何往復しただろうか。車一台は通れるまでにはなったところで登校の間だ。私と小学生の妹は途中で一緒に登校した。通学路はきれいに除雪されていた。歩いているとおばあちゃんが「気をつけてね。」と声をかけてくれた。私たちが通るために一生懸命雪をどかしているおばあちゃんに感謝の気持ちでいっぱいになった。

学校でも雪かきを行った。給食を運んでくるトラックが入れるように雪をどかした。私たちのクラスのみんなが集まっても終わる様子ではない。途中で授業開始になったためそこで終了とした。

自分たちのためにすることも大切だが、他のだれかのために行動するのも悪くないと思った。「やりたくない。」でもだれかがやらないといけない。そのことを理解し、これから生活していこうと思う。雪かきをしてくれたおばあちゃん、本当にありがとう。そして、私をやる気にさせてくれたお父さん、ありがとう。私はこの道徳の授業から、自分がやっただけのため行動をふりかえることができた。私はこれからもずっとこの授業を忘れないだろう。